

山口鷺流の位置（上）——江山本所収曲をめぐって——

On the Eyama Collection of Kyōgen Texts at Center for Regional Literature and Resources
Attached to Yamaguchi Prefectural University, Part I

稲 田 秀 雄

INADA Hideo

はじめに

山口市に鷺流の芸系が残存していることはよく知られている。山口に伝わる鷺流は、明治期にもと長州藩狂言方であった春日庄作（二八一六～一八九七）によって、山口の素人衆に伝えられたものであり、その芸は分家系の鷺伝右衛門派の流れを汲むことが早く指摘されている^①。

ところで、山口鷺流の台本^②として、その春日庄作の自筆本が三十五曲分（重複あり。そのうち「二千石」は語りのみ）現存しているが、いずれも明治期の書写になるものである。それより書写年代の遡るまゝまった台本としては、江山本と称されてきた一冊が残るのみである。

江山本は、石川弥一氏『山口に残存する鷺流狂言』（山口市鰐石能狂言研究会、昭32）に、その名称ですでに翻刻が収められている。同書「例言」には、「江山本（中西氏蔵）」について、「半紙本十八曲、平川村江山家から出たもので、江戸末期の書写と見えるが、正確の筆者はわからない。江山万吉郎又はそれ以前の江山家狂言師の手になったものと推定される」と述べる。江山家は長州藩狂言方の一家で、宝永七年に第五代藩主・毛利吉元に召し抱えられた江山源兵衛助を祖とし、代々鷺伝右衛門派の狂言を伝えたとされる^③。同本が石川氏の述べられる通り、江山家から出た江戸末期の写本であるとすれば、長州藩時代の狂言を書き留めた貴重な資料ということになる。

江山本（本稿でも以下この通称を用いる）は、石川氏が紹介されたように、鷺流狂言伝承者であった中西治郎氏（一八九三～一九七〇）の旧蔵であり、現在は山口県立大学附属郷土文学資料センター所蔵となっている。以下に簡単な

書誌^④を記す。写本一冊。外題「鷺先生直伝／鷺流狂言本／別冊第□□」（表紙に墨書）。その上に半紙の後補表紙を付し、ペン書きで「江山本鷺流狂言／中西蔵」と記す。後表紙には、「昭和七年三月製本／中西治郎蔵」と墨書。その上に半紙の後表紙を付す。袋綴。料紙は楮紙。縦二十三、九センチ、横十六、六センチ。一面行数十二行。全一〇五丁（遊紙途中三丁。尾一丁）。印記なし。奥書なし。「末広^⑤」以下十八曲所収。そのうち冒頭の「末広」は明らかに別筆であり、その特徴的な筆跡から、春日庄作筆と考えられる。なお、本書は、本体の「鷺先生直伝 鷺流狂言本」の後に、別筆（春日庄作筆ではない）の鷺流狂言小舞（下・中・上の順）を合綴する。これは、春日庄作筆の「末広」とともに、旧所蔵者の中西治郎氏によって綴じ合わされたものである^⑥。

このたびは、この江山本所収の十八曲のうち、春日庄作筆の「末広」を除く十七曲を対象として、それらの曲がいかなる流派の系統に属するのかを検証してみることしたい。江山家が鷺伝右衛門派の狂言を伝えていた以上、これらの曲は、当然同派の台本であることが想定されるが、山口鷺流の台本の中には、純粹に伝右衛門派の系統とは言い難い内容の曲が見受けられることも事実である^⑦。長州藩時代の台本と考えられる本書も、この際あらためて検討すべきであろう。

また、想定通り、江山本所収曲が鷺伝右衛門派の系統であると確認することができたとしても、同派の狂言の特徴がどこにあるのか、個々の曲目の内容に即して指摘しておくことは必要であろう。鷺流においては、宗家系の仁右衛門派と分家系の伝右衛門派の間で、詞章・演出に少なからぬ相違があるのであり、そうした両派それぞれの特色については、必ずしも自明のものとはなっ

いないからである。

本稿では、江山本所収曲について、他の鷺伝右衛門派台本、さらには鷺仁右衛門派の主要な台本、及び他流台本（大藏流・和泉流の主たる台本、及び狂言記系諸本も含む）を参照しつつ、要点を比較していくことで、各曲の系統的位位置付けを試みることにする。それは、基本的に長州藩の狂言を受け継いだと考えられる山口鷺流の位置を確定することにつながるであろう。本稿はそのための基礎作業でもある。

なお、本稿で検討の対象となるのは、「地蔵舞」「柑子」「八句連歌」「空腕」「文荷」「千鳥」「鐘ノ音」「蟹山伏」「朝比奈」「八尾」「節分」「神鳴」「梟」「苞山伏」「抜から」「祢宜山伏」「柿山伏」の十七曲である。以下、記載順に見ていくことにするが、今回はまず「地蔵舞」から「朝比奈」までの九曲分の検討結果を掲載する。

1、「地蔵舞」

【道行きの謡】

江山本では、シテの次第・名ノリに続いて、道行きの謡がある。

住なれし我が古里を立出てく 打切 足にまかせて行程にしらぬ里ニも着にけり

享保保教本・宝暦名女川本・常磐松文庫本にも同様の謡がある。安永森本・杭全本・賢茂五番綴本も同じ。大藏流（虎明本・虎寛本、伊藤源之丞本・虎光本）は謡はなく、せりふによる道行きである。和泉流（天理本・古典文庫本、狂言集成本）も同様に、せりふによる道行き。狂言記には「住み馴れし わが古寺をひよつと出て く 足に任せて行ほどに そんじやうそこに着きにけり」という謡があるが、江山本とは詞章が異なる。

つまり、鷺流には仁右衛門派・伝右衛門派を問わず、道行きの謡があるのが特色である。しかも、それは天正狂言本（以下、天正本）の次のような詞章に近い。

我が古里を立出てくあしにまか（せ）て行程にくしらぬ里にそつきにける

他流には基本的に、このような道行きの謡は継承されていない。江戸初期諸本においてすでにそうになっている。狂言記にも道行きの謡があるが、詞章は右の

通り相違する。

以上により、江山本にある道行きの謡は鷺流両派共通の特徴であり、しかも天正本とほぼ一致するのが注目される。

【宿借りのせりふ】

僧は、往來の者に宿を貸すことを禁ずる制札を見ながら、知らぬふりをして宿を借ろうとする。

去ながら知らぬよしにて宿をかるふと存る

享保保教本・宝暦名女川本・常磐松文庫本もほぼ同じ。賢茂五番綴本は「乍去面白おかしう申ないて宿を借ふと存る」と言う（安永森本・杭全本もほぼ同じ）。それとは相違するので、伝右衛門派固有のせりふと考えられる。

大藏流（虎明本は「いや、たゞしらぬかほで参て見う」、虎寛本、伊藤源之丞本・虎光本もほぼ同様）、和泉流（天理本「此高札をしらぬていにて、やどをかつてみまらせうと存る」、和泉家古本・古典文庫本、狂言集成本もほぼ同様）はいずれも、知らぬ顔で宿を借ろうとするのであり、伝右衛門派と共通する。狂言記（笠の下）は禁制の札を見ることなく、宿を乞う。

宿主に宿を貸すことを断られてのせりふに、

尤夫ハそふて御座ろふか旅ハ心世ハ情ケと申程に何卒かして被下い

とある。享保保教本・宝暦名女川本・常磐松文庫本は傍線部同じ。安永森本・杭全本・賢茂五番綴本にはこのせりふなし。傍線部のように「旅は心、世は情け」という諺を引くのは、伝右衛門派固有のせりふと考えられる。虎明本以下大藏流、天理本以下和泉流、狂言記にはこのせりふなし。

また、その後にも宿を借ろうとして、

是ハいかな事 何とした物て有ふぞ イヤ出家も此様な時ニハもふこふ云てもくるしう有まい 少トうそおつこふ

と言い、その後には笠を預けるのである。享保保教本は「是ハ何トシテヨカラウゾ 思イ出シタ ケ様ノ時ハ少ト安語ヲ申テモ方便ト云フテ苦敷ナイ」。宝暦名女川本なし。常磐松文庫本は「是ハ如何な事 誠に宿をかさぬと申 何とした物て有うぞ 仏も方便といふ事をといて置れた 出家も此様な時ハもうごいふても苦敷有舞 ちとうそをつかふ」とある。安永森本・杭全本にはこのせりふなし。虎明本以下大藏流、天理本以下和泉流、狂言記にも、このようなせりふはない。傍線を施したように、ここは享保保教本のせりふを継承しており、

特に常磐松文庫本に近いといえる。

【地蔵の宝号】

僧はまんまと宿を借りて、いったん横になった後、起き出して勤行を始めるが、宿主に制止され、地蔵の宝号を唱える。

思ひ出した 地蔵おとなよふ 扇ニテ下ヲ打テ なむ地蔵大ほさつ〜

享保保教本・宝曆名女川本・常磐松文庫本も同じ。安永森本・杭全本・賢茂五番綴本も同じ。虎明本以下大蔵流、天理本以下和泉流、狂言記にはこのくだりはない。「南無地蔵大菩薩」と扇で床を打ちながら地蔵の宝号を唱えるところは、鷺流両派共通である。しかも他流になく、鷺流固有（両派共通）のせりふ・所作と考えられる。

【地蔵舞の詞章】

イ口詞による囃子舞である地蔵舞の、以下のような詞章に注目したい。

三斗入て十盃七斗入て十盃間の物二四盃引 縁日ニ任せて廿四盃のうだれハ殊之外酔出で（略）六道の地蔵坊か踊たヲ見舞な

傍線部は享保保教本・宝曆名女川本、ほぼ同じ。ただし「六道の地蔵」とする。安永森本・賢茂五番綴本もほぼ同じ。ただし同様に「六道の地蔵」とする。杭全本は「五斗入て拾盃七斗入に十盃」と小異（「六道の地蔵」とするのは同じ）。

他流台本はこれらとは大きく相違する。傍線部について見ると、虎明本は「あひの物で十はい、三斗入て十四はい」「かうじの花が目にあがり」「六道のちぎうが、えひなきしたをこらふぜ」とある（虎寛本、虎光本もほぼ同じ）。伊藤源之丞本は「大土器に十四はい」とある他は虎明本と同じ。天理本・和泉家古本・古典文庫本、狂言集成本も傍線部は虎明本と同じ。狂言記は「七斗入にたぶ〜」「麴の花が目にあがり」「よろり〜とよろめきわたる地蔵坊が踊つたを見さいの」とあり、一部近似した表現があるものの全体としては重ならない。以上により、江山本の傍線部は、他流になく鷺流固有（両派共通）の詞章と考えられる。

【地蔵舞を地謡が謡う】

江山本には、囃子舞としての地蔵舞を地謡に謡わせる演出が認められる。

地 地蔵の住所ハ唐だせんにあんにやうかい（下略）

江山本後記には「地なしに但シシテ計謡処モ有」とある。享保保教本・常磐松

文庫本はシテが謡うが、宝曆名女川本は「地」とある。他流（狂言記も）にはそうした演出が認められない。ここは宝曆名女川本の演出を継承しているといえよう。

2、「柑子」

【柑子に呼びかけるせりふ】

まず、太郎冠者が転がった柑子に呼びかけるところに注目したい。

柑子よ〜と申て御されハ夫を聞入たかして御門之内ニ木の葉をたてに取て留りましたハ是か柑子門ヲ出ずと申事て御座らふ

傍線部、享保保教本は「好事門ヲ出ズト申ハ此様ナ事テ御座リマセウ」とある。安永森本・寛政有江本・賢茂五番綴本もほぼ同じで、鷺流両派とも、柑子が止まったのを見て、これがまさしく「柑子門を出でず」ということだと言う。それに対し、大蔵流・和泉流は、太郎冠者が「柑子門を出でず」と呼びかけると、柑子が止まったとする。虎明本「やい〜、かうじもんをいはずと云事が有程に、やるまいぞ〜と申たれば、かうじもん心か有て、こけとまつて…」（虎寛本、伊藤源之丞本・虎光本もほぼ同じ）、天理本「かうじ門の出ずと云事をしらぬと申たれば、心が御ざつたか、そのままとまつたを…」（和泉家古本・古典文庫本・狂言集成本も同じ）。狂言記外五十番もそれらに同じ。以上により、ここは鷺流両派共通のせりふと考えられる。

【語り】

太郎冠者が、残り一つの柑子（実はこれも食べてしまった）の行方を言いくるめようと、鬼界が島の流人のことを語る。

昔平相国の御時 やれ爰な者ハ夥敷事を云出た 先御間被成ませい
三人の流人有しか一人ハ丹波の少将成経平判官安頼入道式人ハしやめんなり
俊寛一人彼罵におと、まり有 諷其ことく三ツ有し柑子の一ツハほそぬ
け一ツハつぶれ早太冠者か六原へ納りぬ 人と柑子ハ替れ共思イハ同じ
心かや

傍線部については、享保保教本も同じ。寛政有江本・安永森本・賢茂五番綴本も同じ。天理本・和泉家古本・古典文庫本・狂言集成本といった和泉流諸本も同じ（狂言記外五十番も同じ）。鷺流・和泉流は基本的に共通であり、語りの中に六波羅（腹）の秀句を出すのが特徴である。これに対し、虎明本は「一つ

はつづれ一つはほぞぬけ一つはのこる」とあり、ここに六波羅(腹)の秀句を出さない。虎寛本、伊藤源之丞本・虎光本も同じ。なお、天正本は「一はつづれ一は枝もけ一かうちはかわれとも今一つのかうちをは物として候」とある。ここも鷺流両派共通の部分である。

【語り後のやりとり】

節付 最一ツ之柑子おば何ト亦シタソえい(略)シテ柱ニテヌキ足して小廻りして節ヲつけていふ 物と亦致た 主同スル 何ト又して有ぞ シテサシ扇ニテ 物と又致た 主同シシテ 何ト亦して有ぞ シテ切かへし 物ト亦致た 主飛 何ト シテ同飛 物ト 何ト

享保保教本は「大倉ニハ謡ナシニヤイモ一ツハ何トシタゾト問ツメ留ル」と注記しており、この箇所は江山本と同じく、謡によるやりとりである。「モ一ツノ柑子ハ。何ト又シタルソ(略)物ト又イタイタ アト何ト又シテアル シテ物ト又シテ御座ル アトナニト又シタルツ シテ物ト又仕ツタ」、ここまで節付がある。ただし、型付は江山本とは小異がある。安永森本も節の付いた謡のやりとり。寛政有江本は「謡 今一つの柑子をは何と又したそゑい」とあるが、ゴマ点はなし。賢茂五番綴本はゴマ点はないが、足拍子を踏みつつ言う。これに対し、虎明本以下大蔵流諸本・天理本以下和泉流諸本・狂言記外五十番はせりふによるやりとりである。

このやりとりを謡(あるいは拍子にかかるか)でするのが、鷺流両派に共通する演出である。他にこの演出をもつのは、管見の範囲では近世初頭の成立と考えられる祝本のみである(「うたいぶしにか、つて」とある)。ちなみに、天正本は「何として候」「物として候」と、候調のやりとりであるが、節があつたかどうかは不明。

【六波羅(腹)の秀句】

太郎冠者は、残る一つの行方をさらに主人に追及され、次のように言う。

是ハ太郎冠者か六原へ納テ御座る

享保保教本「是モ給テ御座ル」、安永森本「それも私が下されてござる」、寛政有江本「夫をも某か給て御座ル」、賢茂五番綴本「夫を私のたべて御座る」とある。天理本「是もたべて御座る」、古典文庫本「其事で御座ります 余り旨う御座つたに依て夫も私が給ました」とあり、鷺流両派及び和泉流は、最後に六波羅(腹)の秀句を出さない。狂言記外五十番も同じ。ただし、狂言集成本

は虎明本とほぼ同じで、最後に六波羅の秀句を言う。

虎明本以下の大蔵流は、ここに秀句を出すのが特徴である(虎明本「それも太郎くわしやが、六はらへおさめてござる」とあり、虎寛本、伊藤源之丞本・虎光本もほぼ同じ)。祝本も「太郎くわじやが六原へすら〜」と言う。

江山本のこの箇所は、鷺流両派とは相違しており、大蔵流・和泉流三宅派に同じ。江山本では、六波羅の秀句が先の語りの中にもあるので、重複することになる。なお、鷺流両派が最後に六波羅の秀句を言わない点においては、天正本(「それかし酒なにいした」とある)と類似するといえよう。

以上、江山本「柑子」には伝右衛門派固有の詞章・演出を認めたいが、基本的に鷺流台本に一致することは疑いない。しかし、六波羅(腹)の秀句を最後にまた言うなど、大蔵流に近い部分もある。

3、「八句連歌」

「八句連歌」は、連歌の付合に借金の催促と断りの意図を含ませるところに眼目があるが、連歌を始めるまでの展開は、江山本では以下の通りである。

まず借り手が返済の猶予を頼むために、貸し手の宅を訪れる。貸し手は借り手を無理矢理座敷に上げ、戸締まりを命じる。貸し手が返済を迫ると、借り手は座敷の床の間や花に目を付けて褒める。さらに掛け軸、庭の有様を見た後、庭の花に目を留めたところで、貸し手が「夫ニ付て聞ハ其方ハ此間哥連歌の座敷へすい参すると聞た 此桜ヲ題にして少ト当座ヲ召れい」と言う。

享保保教本もほぼこの通りであるが、懐紙を見てから、表八句を始めることになる。仁右衛門派も、寛政有江本・安政賢通本など懐紙を見てから、連歌となる。江山本は、右のように、懐紙を見ることなく、庭の桜を借り手が褒めたのをきっかけに、それを題材に当座をせよと貸し手が勧める。ここは江山本独自の部分といえよう。

この発端は諸流の間で相違する。鷺流は以上のように、仁右衛門派・伝右衛門派ともに、借り手が貸し手の宅を訪れ、そのままそこで連歌を始めることとなる。

大蔵流は、貸し手が借り手の宅へ返済の催促に行くが、借り手は居留守を使い、裏道から逃げる。そこをつかまえて、貸し手の自宅へ連れて行き、返済を迫る。借り手が普請を褒め、懐紙に目を留めたところで、連歌を始めることに

なる。狂言記も大蔵流と同じ。

和泉流は、借り手が貸し手の宅へ返済の言い訳に行くと、貸し手はまた借金に来たかと思ひ、居留守を使う。借り手は、庭の花が盛りなのを見て「花盛り」の句を得たので、それを言つてにするように告げて戻らうとするところを、連歌を好む貸し手が呼び戻して付合となるのである。

【連歌】

この曲における連歌は諸流の間で表現に相違がある。江山本の八句を一句ずつ見ていくことにする。

①花盛り御免なれかし松の風

享保保教本は「花盛御免アレカシ松ノ風」、寛政有江本・安政賢通本・賢茂五番綴本もそれに同じ。他流は、虎明本「花ざかり、ごめんあれかし松の風」（虎寛本、伊藤源之丞本・虎光本も同じ。ただし、虎光本のうち宮島歴史民俗資料館本・関西大学図書館蔵本は「あれかせ」、天理本「花盛御免あれかしまつの風」（和泉家古本・古典文庫本・狂言集成本も同じ）、狂言記「花盛り御免あれかし松の風」とある。この句は鷺流両派共通である。他流・狂言記も同じ。

②桜二なせや雨のうき雲

享保保教本は「桜ニナセヤ雨ノ浮雲」、寛政有江本・安政賢通本・賢茂五番綴本もそれに同じ。他流は、虎明本「さくらになせや、雨のうき雲」（虎寛本、伊藤源之丞本・虎光本も同じ）、天理本「さくらになせや雨のうき雲」（和泉家古本・古典文庫本・狂言集成本も同じ）、狂言記「桜になせや雨の浮き雲」とある。これも鷺流両派共通。他流・狂言記も同じ。

③幾度も霞ニわびぬ月の暮

享保保教本は「幾度モ霞ニ侘月ノ暮」、寛政有江本・安政賢通本・賢茂五番綴本もそれに同じ。他流は、虎明本「いくたびも、かすみにわびぬ月のくれ」（虎寛本、伊藤源之丞本・虎光本も同じ。ただし宮島歴史民俗資料館本・吉田幸一氏蔵本は「わびぬ」、天理本「幾たびもかすみにわびぬ月のころ」（和泉家古本も同じ。古典文庫本・狂言集成本は「月の暮」、狂言記「いくたびも霞にわびぬ月の暮」とある。鷺流両派は「わびぬ」で、江山本とは相違。他流も「わびぬ」。和泉流天理本は第三句「月のころ」。「わびぬ」は虎光本（宮島歴史民俗資料館本・吉田幸一氏蔵本）及び狂言記と共通する表現。春日庄作自筆本も「わびぬ」。

④恋せめかくる入相の鐘

享保保教本は「恋責カクル入相ノ鐘」、寛政有江本「声せめかくる入逢の鐘」、安政賢通本「声責めかくる入相の鐘」（賢茂五番綴本は「恋責掛る」）。他流は、虎明本「こひせめかくるいりあひのかね」（虎寛本、伊藤源之丞本・虎光本も同じ）、天理本「こいせめかくる入逢のかね」（和泉家古本・古典文庫本・狂言集成本も同じ）、狂言記「恋せめかくる入相の鐘」とある。享保保教本と共通。他流とも共通であるが、寛政有江本・安政賢通本の「声」とは相違する。

⑤鶏もしばし心を延て鳴け

享保保教本は「鶏モシバシ心ヲ延テ鳴」、寛政有江本・安政賢通本・賢茂五番綴本もそれに同じ。他流は、虎明本「にわ鳥も、せめてわかれをのべてなけ」（伊藤源之丞本も同じ。虎寛本「せめて別れは」。虎光本は虎寛本に同じ）、天理本「庭鳥もわかれのおりはのべてなけ」（和泉家古本も同じ。古典文庫本「せめて別れを」、狂言集成本「せめて別れは」、狂言記「にわ鳥もせめて別れはのべて鳴け」とある。この句は鷺流両派共通。他流は「せめて別れを（は）」（大蔵流、古典文庫本・狂言集成本も）、「別れのおりは」（天理本）とあり、それらとは相違。春日庄作自筆本は「くだ掛ケハしばし心をのべて鳴ケ」とあって、小異。

⑥人めゆるさぬ恋の関守

享保保教本は「人目赦サヌ恋ノ関守」、寛政有江本・安政賢通本・賢茂五番綴本もそれに同じ。他流は、虎明本「人目もらさぬ恋の関守」（虎寛本、伊藤源之丞本・虎光本も同じ）、天理本「人目もらさぬ恋の関守」（和泉家古本・狂言集成本も同じ。古典文庫本「もらさぬ」、狂言記「人目もらさぬ恋の関守」。鷺流両派で共通。他流の「もらさぬ」（大蔵流、古典文庫本も）、「もらさぬ」（天理本・和泉家古本・狂言集成本）とは相違。

⑦名の立に使なてそ忍び妻

享保保教本は「名ノ立ニ使ナ付ソ忍妻」、寛政有江本・安政賢通本・賢茂五番綴本もそれに同じ。他流は、虎明本「名のたつに、つかひはつけそ」（使な、つけそ）しのびづま」（虎寛本「使なつけそ」、虎光本は虎寛本に同じ。伊藤源之丞本「使なつけそ」、天理本「名のたつに使はつけ（げ）そしのび妻」（和泉家古本・古典文庫本・狂言集成本も同じ）、狂言記「名の立つに使いなつけそ（告げそ）忍び妻」。享保保教本、仁右衛門派及び他流「つけそ」とは相違しており、江山本独自の表現。春日庄作自筆本も同様に「立てそ」とする。

⑧ 余りといへば文をこそやれ

享保保教本は「アマリシタヘバ文ヲコソヤレ」、寛政有江本・安政賢通本・賢茂五番綴本（「文こそやれ」）もそれに同じ。他流は、虎明本「あまりしたへば、文をこそや（れ）」（虎寛本、伊藤源之丞本・虎光本も同じ）、天理本「あまりしたへば文をとらす」（和泉家古本・狂言集成本も同じ。古典文庫本「文をこそやれ」、狂言記「あまり慕へば文をこそやれ」。享保保教本、仁右衛門派及び他流は「したへば」とある。江山本は、明らかに「余りといへば」と読める。誤写もしくは訛伝の可能性もあるが、一応ここは江山本独自の表現と見ておきたい。ちなみに、春日庄作自筆本は「あまりしたへば」とあって、享保保教本に同じ。

以上により、本曲の連歌はおおむね鷲伝右衛門派の特徴を備えているが、第三句・第七句・第八句など、他の伝右衛門派台本とは相違する表現も認められる。特に第七句・第八句は江山本独自の表現といえる。

4、「空腕」

【主人の言いつけ】

主人は太郎冠者を呼び出し、次のように命じる。

今晚各を申入る筈しや 汝ハ大義ながら淀居て鯉を求てこひ

宝曆名女川本は「明日各々へお茶を進上とおもふが何とあらふぞ（中略）夫に就て汝はほねおりなれ共、淀へいて鯉を求てこひ」とあって、江山本とは異なる。寛政有江本「明日ハ珍客を申請ほとに淀へいて肴物を調てこい」、杭全本「明日客来を申請る 汝は太義ながら只今淀へいて肴ものを求てこい」、賢茂五番綴本「明日客を申入る、程に。汝は淀へ行て鯉を求てこい」（安永森本もほぼ同じ）とある。虎明本は明朝の振る舞い。虎寛本も明日の「御参会」のため（伊藤源之丞本もほぼ同じ）。虎光本は今晩の客のため。古典文庫本は、俄の客のため、淀へ「鯉なりとも鮒なりとも」肴を求めに行かせる（狂言集成本もほぼ同じ）。今晚の客のためという江山本の設定は、他流の中では、虎光本に近しいといえる。

【太郎冠者が夜道でおびえるところ】

東寺へ来た後、太郎冠者はまずいばらぐろを人と見ておびえる。宝曆名女川本は、ここで太刀を進上しようと言ったりするが、江山本はそのせりふがなく

簡略。次に、江山本では、枯尾花をくちなわ（蛇）と見るが、宝曆名女川本はそのくだりが無い。寛政有江本は「川よけの杭」、さらに薄の穂を人と見ておびえる。安永森本は、いばらぐろを人と見ておびえた後、目をふさいで歩き、大木にぶつかるのであり、枯尾花をくちなわと見るくだりはない（杭全本も同じ）。賢茂五番綴本は、太郎冠者が夜道でおびえる場面は短く、物を人と見誤ることもなく、すぐに後を付けてきた主人に太刀を奪われる。この場面は、仁右衛門派の中でもこのように揺れがあるが、いずれも江山本（あるいは宝曆名女川本）とは相違する。

虎明本は杭を人と見て怖がる。虎寛本は杭、そして並木の松を人と見る。伊藤源之丞本はいばらぐろを見ておびえるのみ。虎光本は、並木の松、杭を人と見た後、「くされ縄」をくちなわと見る。古典文庫本は、いばらを人と見た後、大勢の人が見えると言っておびえる。狂言集成本も同じ。

この後、太郎冠者が主人に打たれて、盗人に切られたと思ひ込み、実は死んでいなかったことに気づくまでの独白は、宝曆名女川本より長い。これは宝曆名女川本の後記「太郎冠者詞を長くする時は入て云」にほぼ同じである。宝曆名女川本の別演出を取り入れたものであろう。ただし「助け給へ〜」と念仏を唱えるあたりは異なる。

【太郎冠者のにせの手柄話】

江山本は、①東寺のあたり（何にも会わず）、②四塚（三人）、③淀・鳥羽の間（四、五十人）、という三場面から成り、基本的に宝曆名女川本に近い。③の場面では鉄砲まで出てくるのが特徴。寛政有江本は、①東寺の四塚（三十人程）、②長刀遣いを相手に奮戦、という構成で、伝右衛門派より簡略。安永森本は、①東寺のあたり（四、五人）、②鳥羽と横小路の間（七、八十人百人）から成る（杭全本も同じ）。賢茂五番綴本は、①四塚の先（大の男四五人）、②七、八十人を相手に奮戦、という構成で、安永森本・杭全本よりもさらに簡略である。

虎明本は、①東寺の分離（七、八十人）、②上鳥羽・下鳥羽の間（五、六十人）、③淀・鳥羽の間（多勢）の三場面。虎寛本は、①東寺の分離（四、五人）、②上鳥羽・下鳥羽の間（二、三十人）、③淀・鳥羽の間（七、八十人）。伊藤源之丞本は、淀・鳥羽の間の場のみの簡略なたち。虎光本は、①東寺の藪影（十八、九人、二十人）、②鳥羽縄手（二、三十人）、③淀・鳥羽の間（七、

八十人百人)の三場面から成る。古典文庫本は、①東寺から先(四、五人)、②鳥羽と横大路の間(七、八十人百人)、狂言集成本も、①東寺から先(四、五人)、②上鳥羽・下鳥羽の間(七、八十人百人)で、ほぼ同じ。いずれも江山本には一致しない。

以上、江山本は部分的には宝曆名女川本(しかも別演出を取り込んだかたち)に近いといえるが、夜道でおびえるところなど、江山本独自のくだりも認められる。

5、「文荷」

【文を担う謡】

太郎冠者・次郎冠者は、能「恋重荷」の謡を謡いつつ、恋文を担う。

太らヲモク共持てや〜次郎冠者 アトひめじが腹立や 二人よしなき恋ヲすがむしろ伏て見れ共おられこそ くるうしや独り寝の 我が手枕の肩かへて持とも持たれぬ そも恋ハ何の重荷ぞ

宝曆名女川本は「もてや〜次郎官者」「しめじか腹立や、よしなき恋をすがむしろ、ふして見れ共おられこそ、くるしや独りねの我が手枕のかたかえて、ん、もてども持たれぬ、そも恋は何のおもにぞ」、賢茂五番綴本「荷ふたり此文のよしなき恋をすがむしろ。ふして見れどもおよれバ社。くるしや独り寝の。我手枕の。エイ。肩替へて。持てどももたれず。そも恋ハ重ひ物かな」(安永森本・杭全本も同じ)とある。

他流は、虎明本「よしなきこひをするがなる、ふしてみれどもおられはこそ、くるしやひとりねの、わが手枕のかたかへて、もてどももたれず、そもこひは、なにのおもにぞ」(山本東本も同じ)、虎清本「よしなきこひをするがなる。ふしてみれともおられはこそ。くるしやひとりねの。わかたまくらのかたかへて。もてどももたれず。そもこひは。なにのをもきそ」、天理本「しめちかはらたちや、よしなき恋をすかむしろ、かたにもてどももたれもせず、くるしやひとりねの、我たまくらのかたかへて、もてどももたれず、そもふみはなにのおも荷ぞ」(古典文庫本・狂言集成本も同じ)、続狂言記「荷文」「よしなき恋をするがなる 富士で見れどもおられはこそ 苦しやひとり寝の 我手枕の肩かへて 持てども持たれず そもこは何の重荷ぞ」とある。

この謡は宝曆名女川本に近い。ただし、謡い出しに「重くとも」を加える。

仁右衛門派は、謡い出しが「荷ふたりこの文の」(安永森本・杭全本・賢茂五番綴本)、さらに「およればこそ」「持てども持たれず」「重いものかな」等の箇所が異なる。江山本は基本的に、伝右衛門派の詞章と考えられる。なお、長府伝承本である浜田本は「シテ持てや〜次郎官者 二人しめじが腹立や よしなき恋をすかむしろのふして見れ共おられもせず 苦敷や独りねの我手枕のかたかへて持テ共持れぬ そも恋ハ何のおもにぞ」とあって、傍線部に小異があるが、江山本にほぼ一致する。大蔵流は「駿河なる」、和泉流は「肩に持てども持たれもせず」が異なる。

【恋文】

二人の冠者が読む恋文の文章、そしてそれを読んでの感想に特徴的な表現がある。

(太郎冠者) しづ心なき思ひトなり 二ら扱も〜ふとや〜

宝曆名女川本は「アト「しづ心なきをもいとなり、シテ「ふとや〜、と云て笑」、賢茂五番綴本はこの文句なし。従って「ふとや〜」もなく、「シテ読ふで聞せふ。君の御志の忝さハ。日本の山々と書てあるハ 次郎何じや山〜 シテ中々 二人山〜〜〜〜〜笑 次郎某にもちと見せさしませ(略) 何々我身のおもひ海ならバ着海。山ならバしゆみせん シテ何んじやしゆみせん 次郎中々 二人しゆみせん。〜〜〜〜〜笑」とある(安永森本・杭全本も基本的に同じ)。このくだりは伝右衛門派固有のものと考えられる(ただし浜田本はこのくだりなし。しかし、その他は基本的に江山本・宝曆名女川本と一致する)。

【小歌】

加茂の河原ヲ通るとて文を落して風の便りニつたへ届ケよかし

宝曆名女川本「加茂の河原を通るとて、文を落して風のたよりでとゞけよかし(かもの川原を通るとて、ふみをおとしたよのふ、かぜのたよりでとゞけよかし)」、賢茂五番綴本「志賀のうらを通るとて。文を落イタ。浜松の風の便りに。つたへきかせよ風の便りに」(安永森本・杭全本も同じ)。他流は、虎明本「かもの川原をとるとて、ふみをおといたよなふ、かぜのたよりに、つたへとゞけかし」(虎清本・山本東本も同じ)。天理本「しかの浦をとるとて、ふみをおとひた、はままつの風のたよりに、かせのたよりに」(狂言集成本も同じ)。古典文庫本は「文をおとした」、続狂言記「鴨の河原を通るとて、文を落とし

たよの、風の便りに伝へ届けかし。

江山本は、宝曆名女川本とほぼ同じ。これは伝右衛門派固有の詞章と考えられる。虎明本・続狂言記(浜田本は続狂言記と一致)とは小異がある。仁右衛門派は「志賀の浦を通るとて」と始まり、和泉流に近いが小異あり。

【文を扇く演出】

二人の冠者が破れた恋文を小歌を謡いつつ扇ぐところの演出について、江山本は、

二人して小哥云テ扇開き乗テ立廻る

と注記する。宝曆名女川本は「二人共に、おどりぶしに云て、のりながらおどる」とあり、現行山口鷺流も、いわゆる小歌節ではなく、踊り節でノッて謡う。浜田本も「ヲトリフシニテアラク」とあり、踊り節で謡う演出は、宝曆名女川本、現行山口鷺流に一致する。これも伝右衛門派固有の演出と考えられる。以上、江山本「文荷」は、詞章・演出ともに宝曆名女川本にかなり近い。

6、「千鳥」

この曲は、伝右衛門派の台本としては、常磐松文庫本に抜書本(主人と酒屋の分)が残るのみで、他の主要な本にはない。かつて宝曆名女川本の「盗類雑」に「衛(千鳥)」が収められていたが、現在行方不明である。山口鷺流の台本としては、他に春日庄作自筆本・中西本にある。また、長府鷺流の台本である浜田本にもある。大蔵流・和泉流の主たる台本にあり、狂言記拾遺にもある(対馬祭)。天正本には「浜千鳥」の曲名で記載がある。なお、近代の活字本であるが、『狂言独習全書』(金櫻堂、明30)が鷺伝右衛門派の台本を採用した¹⁴⁾よう¹⁵⁾で、「千鳥」を収めている。

【冒頭のやりとり】

晩程客来か有程ニ毎もの酒屋へいて能酒を樽につめて取てこい 畏て御座る 代りを被下い 代りハ先日そちニ渡で置た 夫ハ皆遣ひ切て御座らぬ 此度ハお手前から御出し被成たら能御座ろふ

安政賢通本は「今晩客来を申し受くるによつて、いつもの酒屋へいて酒を取つて来い。シテ畏まつてはござれども、このお使をば御許されて下されませい。主女はなぜにさう言ふぞ。シテこなたにも思召してもごらうじらしい。前前の酒代をも遣はされいで、参つたりとも詰めておこさうとは申しますまい。この

お使をば、御許されて下されませい」とある(安永森本・杭全本もほぼ同じ)。寛政有江本も、対話の流れとしては右にほぼ同じ。

江山本では、冠者がすぐさま代わりを要求するが、主人は持ち合わせがない。安政賢通本その他の仁右衛門派では、冠者は酒代のツケがたまっている¹⁶⁾ので、この使いを勘弁してほしいと言いつつ出す。このように両派で、対話の進行が異なっている(なお、江山本には明記されていないが、現行山口鷺流では、このやりとりの後に、主人が袂や懐を探る型がある)。

【太郎冠者の仕方話】

江山本では、以下の三つの話をする。

- ①二見が浦で千鳥を寄せるところ
 - ②台持(大物)を引くところ
 - ③加茂の競馬の真似
- また、これらとは別に、酒市の話が別演出として、以下のように末尾に記されている¹⁵⁾。

先酒市が立まして御座る 扱々夥敷樽で御座る 下よりこふ見上る様ニ御座る つミ上まして大の男が大鉢まきを致て是程も御さるふかもそつとも 大きい御座ろふかト申樽ヲ下よりはらび繩を持てきりくくと巻立まして上の結び目へ手ヲ懸ましてつとつとさし上つ、くくく 右の通り桶を詞の通りしてつづくくト橋か、りへ行 アト留る 夫より千鳥ニ成ル

春日庄作自筆本ではこのくだりを本演出に入れており、現行山口鷺流もそれを踏襲する。従って、現在は、①酒市の話→②千鳥を捕らえる真似→③大物を引く真似→④加茂の河原の競馬の真似という構成である。

しかし、本来鷺伝右衛門派の演出は、江山本のように、①千鳥→②大物→③競馬の三つを行うのではなかったか。常磐松文庫本(抜書本)も酒屋のせりふのみの抜書によるしかないが、酒市の話はないようである。浜田本も同じ。『狂言独習全書』も同様で、酒市の話は見当たらない。中央(江戸)の伝右衛門派が基本的にそのようであったとすれば、酒市の話を入れるのは、長州藩独自の演出であった可能性も否定できない。

大蔵流は、①千鳥を伏せるところ、②山鉾を引くところ、③流鏑馬の真似となる。和泉流は、①千鳥を伏せるところ、②流鏑馬の真似と続き、古来、山鉾を引くところがない。仁右衛門派の寛政有江本・安永森本・杭全本・安政賢通

本は、大蔵流と同じ。狂言記拾遺は、①千鳥↓②山（山を作り舟に乗せ、片端から押す、引く）と云う）↓③流鏑馬の順で、これも大蔵流に同じ。

【結末の演出】

江山本は、結末に冠者が酒屋の足を竹杖で打って倒す演出がある。

は、のけく〜 アト大臣柱へ行トシテ云ながら竹ニテアトヲ打伏ル アト下二居トシテ樽ヲ持テ飛ながら橋か、りへ行也

これは他派・他流になく、伝右衛門派独自の演出と考えられる。『狂言独習全書』にも、ト書きに「能キ所ニテ アトヲ竹ニテ打 アト倒レル」とある。山口鷺流でも現在のこの演出が行われている。

なお現在、山口鷺流では、酒屋が倒れると、冠者は樽（葛桶）を肩にかつぎ上げて、「御馬が参る、御馬が参る」と繰り返しながら、幕へ入る。河野本（河野晴臣編『鷺流狂言手附本 附小舞間』山口市中央公民館、昭46。現行山口鷺流の演出はほぼこれに基づく）に、そのことが明記されている。江山本では「樽ヲ持テ」とあるのみで、かつぐかどうかは不明。春日庄作自筆本にも所作は明記されていない。浜田本は「樽ヲ提テ楽屋ノ方ニ行ク」とあり、他流と同じように、樽を提げて行くことになっている。

7、「鐘ノ音」

【主人の名ノリ】

江山本では、主人は次のように名乗る。

是ハ相模の国三浦に住居致者て御座る

宝暦名女川本・常磐松文庫本（抜書本）も同じく、三浦の者と名乗る。浜田本も同じ。狂言記拾遺も同じ。一方、仁右衛門派（安永森本・寛政有江本・賢茂五番綴本）は「このあたりの者」という常の名ノリで、伝右衛門派とは相違する（杭全本も「主名乗呼出し如常」とある）。虎明本以下の大蔵流も同じく「このあたりの者」。天理本以下の和泉流も「あたりの者」とする。この名ノリは（狂言記拾遺とも共通するが）、基本的に伝右衛門派の詞章と認められる。

【訪れる寺と鐘の音】

江山本において、太郎冠者が廻る寺とその鐘の音は次の通りである。

- ①寿福寺↓しやんも、 是ハいかな事 是ハ跡かない
- ②円覚寺↓かんく〜 あ、是ハおしい事哉 能音に成るがつき手がわる

いかして音かかた

③極楽寺↓ひしやく〜 是ハいかな事 ひッゲが有か割れたか

④建長寺↓じやんもんく 去ればこそ能音じや

宝暦名女川本は「①寿福寺↓しやあも、 是はあとかわるい、きこへぬ、②円覚寺↓かんく、 是はよいねのかねじやが、つきてかわるいか、ねかあまりかたひ、③極楽寺↓しややく、 ひ、きか有か、但しわれたか、④建長寺↓しやあ、も、く、く、く、さればこそよいねかな、常磐松文庫本は「①寿福寺↓じやアンモ 是ハ跡か聞へぬ、②円覚寺↓カンく〜 是ハ余りかたい音じや、③極楽寺↓ビシヤアン ハ是ハ如何な事 合点のゆかぬ事しや 響がいたか但しわれたか、④建長寺↓じやアンモンく〜 さればこそ能音じや」とある。

江山本は、右のように、①寿福寺（余韻がない）↓②円覚寺（音が堅い）↓③極楽寺（割れ鐘のよう）↓④建長寺（よい音）の順で、宝暦名女川本・常磐松文庫本と一致する。鐘の音の形容も同じ。極楽寺の鐘の音は、特に常磐松文庫本に近い。浜田本も同じ。

これに対して、仁右衛門派（安永森本・寛政有江本・杭全本・賢茂五番綴本）は三箇所を廻る。すなわち、①寿福寺（割れ鐘のよう）↓②円覚寺（音が堅いまたは小さい）↓③建長寺（寛政有江本は極楽寺）（よい音）の順で、円覚寺の鐘の音が堅いとするのは共通であるが、それ以外は江山本・宝暦名女川本と相違する。

虎明本を始めとする大蔵流は、弥右衛門派・八右衛門派ともに、①五大堂↓②寿福寺↓③極楽寺↓④建長寺の順で、後の謡にも五大堂が出るのが特徴。和泉流は、天理本では、寿福寺・円覚寺・建長寺の三箇所を挙げるが、詳細は記さない（和泉家古本も同様）。古典文庫本は、①寿福寺↓②円覚寺↓③極楽寺↓④建長寺で、伝右衛門派と同じ。ただし三番目の極楽寺の鐘が最上で、建長寺は「ビシヤく〜く〜く〜」と「ひゞき（鱗割れ）がいてある」として、悪い響きとするのが特異。狂言集成本は、寺の順は古典文庫本と同じであるが、最後の建長寺を最上とする。狂言記拾遺は①五大堂（破れ鐘）↓②寿福寺（堅い音）、③極楽寺（よひ音）の順で、五大堂から始めるのは、大蔵流に似るが、建長寺には行かない。

以上により、この箇所には鷺伝右衛門派の特徴が認められる。

【太郎冠者への所望】

江山本では、主人の方から仲裁人を通して、冠者に鎌倉の話をするよう所望する。鶯流両派は仲裁人が出るかたちで、大蔵流（ただし、伊藤源之丞本は出ない）と同じ。和泉流・狂言記拾遺は仲裁人が出ない。

夫ならハ堪忍も致ませうかあいつか鎌倉迄中々参る事でハ御座らぬ 真実
いたならハ其聞た所々の咄しをせいと被仰て被下い

宝曆名女川本は「其上あいつめは鎌倉迄参る事は御座らぬ、又、参たらはそのきいた所を、まのふで見せいと被仰て被下い」と、主人から所望する。常磐松文庫本も「其上あいつめハ鎌倉まで参る事ハ御座らぬ 参つた成ハ其聞た所々を学ふで見せいと被仰て被下い」と、同じく主人から所望する。仁右衛門派の安永森本・寛政有江本・杭全本・賢茂五番綴本は、それぞれ太郎冠者が思いつき、仲裁人に提案する。

虎明本・虎寛本は「やい／＼わび事をした程に、寺々のかねの音をきいた様子を、うたひに作て、あの前へいで、いへ」と仲裁人から提案する。伊藤源之丞本は仲裁人が出ず、「鐘の音を聞て参りました所を、まなふで御目にかかけせう」と太郎冠者から直接主人に申し出る。虎光本は仲裁人が出るが、鶯仁右衛門派と同じく、太郎冠者が思いつき、仲裁人に提案するかたちである。

天理本以下和泉流（和泉家古本・古典文庫本・狂言集成本）は、仲裁人が出ず、太郎冠者が思いつく。狂言記拾遺は「それも鎌倉へも行も致さず、参つたと申やら知れますまひ、様子を尋ふと存る」と主人から所望するが、仲裁人は出ない。

冠者が鎌倉へ行ったかどうかかわからないので、様子を聞こうと仲裁人を通して所望する江山本のかたちは、宝曆名女川本・常磐松文庫本に一致（浜田本も同じ）。仁右衛門派は、太郎冠者が主人の機嫌を直すために謡を謡うことを自分で思いつくのであり（虎光本も）、江山本・宝曆名女川本とは相違する。狂言記拾遺もこれに似るが、仲裁人が出ないところは相違。

以上により、この箇所は伝右衛門派のかたちと考えられる。

【太郎冠者の謡】

先鎌倉につうと。入相の鐘是也。東門ニ当りてハ寿福寺の鐘。諸行無常とひゞくなり。南門な円角寺是生滅法とひゞく也。扱西門ハ極楽寺。是亦せうめつ／＼の祈り北門ハ建長寺じやくめついらくとひゞき渡れバ何れも

鐘の音聞落し夜ハほの／＼と明ケければいわた登るか立帰り小町にて。子持が母の土産に紅皿壱ツ買持ツて。急で帰るかいもなくさもあらけなき主殿にそくびをとられつき鐘の／＼ひゞきに花をぞ直りける

傍線部について、宝曆名女川本は「生滅々巳のことわり」「ひゞきたれば」「夜はほの／＼と明ければ、いわれのほるか立帰り、小町にて子持か母のみやげに、へにさらひとつかひもちて」「なをりける」とある。寛政有江本は「せうめつ／＼ちのことわり」「ひゞきて」「夜ハ朗々と明ければいわてのほるか。立帰小町にて子持か母のミヤげに紅さら一つかひもちて」「なをしける」（安永森本・杭全本も同じ）、賢茂五番綴本は「生滅。めつちの断り」「響バ」「夜ハほの／＼と明ければ。いわで登るか。立帰り小町にて。子持ちは、の土産に。紅皿ひとつかひ持て」「直しける」とある。

虎明本は「東門にあたりては五だいだうのかね是なり」とあり、傍線部は「生滅々巳の心」「ひゞきたれば」「いそひでのほるか又立かへり、こもちがかたへのみやげにせんとてべにざら一つ、かひもちて」「なをりける」（虎寛本は、紅皿を買うくだりがなくなり、「急でのぼる心もなく、さもあらけなき主殿に」と続き、後は同じ。伊藤源之丞本は「ひゞきたりて」が異なる。後は虎寛本とほぼ同じ。虎光本は虎寛本と同じであるが、「なをしける」が異なる）とある。天理本は、傍線部が「せうめつめつちのことわり」「ひゞきたれば」「是までなりとて帰りしか、又立かへり、こ町にて子共か母のみやげにせんとて、さうり一足、へに皿ひとつかひとつて」「はなをやなおるらん」（和泉家古本・古典文庫本も同じ。狂言集成本は紅皿を買うくだりがなくなり、虎寛本と同じく「急いで登るかひもなく。さもあらけなき主殿の」と続き、末尾は「直すらん」とある。続狂言記は「南門に当たりては五太堂の鐘これなり 是生滅法と響くなり」とあり、傍線部は「生滅滅巳の心」「響きたれば」「急ひで上るがまた立帰り、子持が方へのみやげにせんと紅皿壱ツ買持て」「直りける」とある。

江山本は、宝曆名女川本にほぼ一致（常磐松文庫本は謡を記さない）。浜田本もほぼ同じ（「急で帰る詮も無く」「返し）そ首を取つて搗鐘の」は小異）。ただし、「夜ハほの／＼と明ケければいわた登るか立帰り小町にて。子持が母の土産に紅皿壱ツ買持ツて」は、仁右衛門派にも見え、鶯流両派共通の部分である。ただし仁右衛門派には「響きて」「響けば」「直しける」等の小異があるので、江山本は伝右衛門派の詞章と考えられる。他流（続狂言記も含む）は、

いずれの台本も江山本とは一致しない。

【結末】

江山本の結末は追い込みで、仲裁人が止めながら追うかたちである。

己れハにくるやつの 申々先堪忍を被成い ア、ゆるさせられいく
これは宝曆名女川本・常磐松文庫本と一致（浜田本も同じ）。これに対して、仁右衛門派諸本は和解の留めとなっており、江山本等とは相違する。追い込みにするのが伝右衛門派の型と考えられる。

なお、天理本は追い込みであるが、仲裁人は出ない。ただし古典文庫本・狂言集成本は叱り留め。大蔵流は、基本的に虎明本以来叱り留めにする（八右衛門派も同じ）。狂言記拾遺も同じく叱り留め。つまり、本曲の結末は三通りあり、それに対応する主な諸本は以下の通りである。

○追い込み 鷲伝右衛門派諸本（宝曆名女川本・常磐松文庫本・江山本）、
天理本・和泉家古本

○叱り留め 大蔵流諸本、古典文庫本・狂言集成本、狂言記拾遺

○和解 鷲仁右衛門派諸本（安永森本・寛政有江本・杭全本・賢茂五番綴本）

8、「蟹山伏」

【山伏の次第】

大峯掛ケテ葛城や〜我が本山ニ帰らん

宝曆名女川本は「大峯かけて葛城や、〜、我が本山に帰覧」とある。この次の文句は、諸流を見渡すと三通りある。江山本以外で見ると、

①大峯かけて葛城や、〜、我が本山に帰らん↓宝曆名女川本、安政賢通本・賢茂五番綴本、伊藤源之丞本（替謡として②もあり）・虎光本、茂山真一本・山本東本、天理本（替謡として②もあり）・狂言集成本

②三つの峰入り駆け出なる、〜、行者ぞ尊かりける↓虎明本・虎寛本、虎清本、古典文庫本

③貝をも持たぬ山伏は、〜、道々うそを吹かうよ↓安永森本・寛政有江本・杭全本、続狂言記

江山本は①のかたちで、宝曆名女川本、安政賢通本・賢茂五番綴本と一致。仁右衛門派のうち、安永森本・寛政有江本・杭全本は③であって相違する。大蔵流・和泉流は①か②である。

【山伏の名ノリ】

是ハ出羽の羽黒山より出たる客僧で御座る

宝曆名女川本は「是は出羽の国齒黒山より出たる客僧で御座る」（安永森本は「かけ出の山伏」とする。杭全本もそれに同じ）、寛政有江本は「是ハ出羽の羽黒山の山伏成か…」、安政賢通本は「これは丹波の国、大江山より出でたる、駆け出の山伏です」とある。他流・続狂言記も含め、おおむね羽黒山から出た駆け出の山伏とする。江山本は、特に宝曆名女川本と「客僧」という表現が一致する。安政賢通本（賢茂五番綴本も）は、大江山の山伏とするので相違する。虎明本は「是は大みね、葛城熊野山を仕りたる、かけ出の客僧にて候」（虎清本も）と名乗るが、後の虎寛本は羽黒山の山伏となっている（虎光本も同じ。伊藤源之丞本は山伏の名ノリなし。和泉流諸本も同じく羽黒山の山伏）。

【蟹が現れる場所】

爰ハどこじや 鈴か峠とも亦ハ蟹か坂トモ申増る 蟹か坂ト云ふハ子細か有か 中々いわれこそ御座れ 古しへ此処ニ大きな蟹か住て人を取たと申増る 恐敷事でハ御さらぬか 誠ニおそろしい事じや ヤイのかかわく 水ヲ一ツ呉い 爰元に流れハないか されバ爰元にあれハ能御座るが 汝才覚をせい 畏テ御座る 正面出テ 是に能流か有 是へ御座りませい 心へた

江山本では、蟹が現れる場所を「鈴か峠とも亦ハ蟹か坂」と言う。この部分は宝曆名女川本にない。寛政有江本は川の景色、安政賢通本は沢辺の景を見ているところに蟹が出る。杭全本は俄に空の気色が変わり、蟹が出現。安永森本は「江州蟹が坂へ来た」と言うが、その由来の説明はない。しかし、常磐松文庫本には、強力のせりふの抜書があり、その中に「又曰」として、替えのせりふと思しきものが次のように記されている。

此所ハ蟹か峠ともかにかが坂とも申て昔此所に大きな蟹が住んで人を取つたとやら申する 今ハ其蟹が化て出るとやら申て御座るか何と恐しい事でハ御座りませぬか 畏て御座る 此他に流ハないかしらぬ迄いや是に流か有 申々是に水か御座りまする 是へ御座れ

傍線部を除いて江山本とおおむね一致するので、江山本のせりふはこれをやや簡略にしたといえる。ここのせりふは、伝右衛門派特有（ただし宝曆名女川本以降の工夫か）と考えられる。

虎明本・虎清本・伊藤源之丞本、天理本・古典文庫本・狂言集成本、続狂言記は地名なし。虎寛本・虎光本・茂山真一本・山本東本は「江州蟹が沢」へ来たと言うのみである。

【蟹の謎】

両眼天に有 一甲地に落ズ 大足式足小足八足 右行左行して遊ぶ物の情じや

宝曆名女川本は「両眼天に有り、一甲地に落ず、大足小足四足八足、右行左行して遊者じや」、寛政有江本は「二眼天に有一甲地に落す大足小足四足八足右行左行してあそぶものにて候」（安永森本もほぼ同じ。ただし「遊ぶ者ぢや」。杭全本は「地二付ズ」「遊ぶものにて有ぞとよ」、安政賢通本は「二眼天に在り、一甲地に着かず、大足二足小足八足、右行左行して遊ぶ者ぢやよ」（賢茂五番綴本も同じ）とある。

他流は、虎明本「天に二がんあり、一こう地におちず、あふ、大そく二足にして小足八そく、うぎやうさぎやうして心をなくさむもの、せいなり」（虎清本は「二がん天にあり」、虎寛本「二眼天に在、一向地に着かず。大足貳足小足八足、右行左行して遊ぶもの、精にて有るぞとよ」（虎光本も同じ）、伊藤源之丞本「一甲地に落ず、両眼天にあり、大足二足小足八足、右行左行して遊ぶもの、情にてあるぞとよ」、天理本「二眼天にあり、一こう地につかず、大足二足小足八足、右行左行して、世をわたる者のせいしや」（古典文庫本も同じ。狂言集成本は「両眼」、続狂言記「両眼天に有、一甲地に付ず、大足二足、小足八足、右行左行して遊物じや」とある。

宝曆名女川本は、傍線部のように「大足小足四足八足」とあり、江山本とは小異。鶯流は、安政賢通本（賢茂五番綴本も）を除き、安永森本・寛政有江本などの仁右衛門派も同じく「大足小足四足八足」とする。江山本のこの部分は、安政賢通本（賢茂五番綴本、また大蔵流・和泉流・続狂言記も）と一致する。ただし、「二眼」「地に着かず」が相違する。

【蟹に対して強力が祈る】

其儀ならハあれづれで御座る程ニ祈り習ひに私に被仰付ませい（略）いかに蟹目の前に奇特ヲミセンとて一祈りこそいのりけれ ほろんくく

宝曆名女川本は「其儀ならば、あれづれで御座る程に、祈り習ひに私に仰付ら

れませう（略）如何に蟹目、まの前に奇特を見せんと、ひといのりこそいのつたれ、ぼろをんくく、伊呂波にほへとちりぬるをわか、ぼろおんく」（安永森本・杭全本もほぼ同じ）、寛政有江本は「某の祈りつふしませう（略）橋ノ下ノセウフヲ云テ」、安政賢通本は「それならば稽古の為祈つて見よ（略）いろはにほへとちりぬるをわか。ぼろおんく、ぼろおんく」（賢茂五番綴本もほぼ同じ）とある。

山伏より先に強力が祈るが、蟹に耳を挟まれてしまうところは鶯流両派共通の特徴。ただし江山本は、強力自ら祈ろうと言い出すのであり、これは宝曆名女川本に一致する。仁右衛門派の中でも安永森本・杭全本がそれと同じ。寛政有江本も簡略ながら同じ。安政賢通本（賢茂五番綴本も）は、山伏が強力に祈るよう勧める。

祈りの文句も、江山本は宝曆名女川本（安永森本・杭全本も）に同じであるが、「伊呂波にほへとちりぬるをわか」以下はない。宝曆名女川本をやや簡略にしたかたちといえよう。

他流は強力が祈ることなく、まず蟹に詰め寄る（虎明本・虎清本・伊藤源之丞本）か、あるいは金剛杖で打ちかかろうとする（虎寛本・虎光本、天理本・古典文庫本・狂言集成本、続狂言記（さらに詰め寄ることもあり）と、蟹に耳を挟まれることになっている。

【山伏の祈り】

いかに大悪心の蟹成共某の印の結で懸るならハいかで奇特のなかるべきほろんく

（亦祈 東方ニ降三世明王南方ニ軍陀利夜叉明王西方ニ大威徳明王北方ニ金剛夜叉中王ニ大日大聖不動明王のさつくに懸て祈るならバいかで奇特のなかるべき ほろんく共）

宝曆名女川本は「東方に降三世明王、南方に軍多利夜叉、西方大威徳明王、北方ニ金剛夜叉、中王に大日大聖不動明王のさつくにかけて祈るならば、如何成大悪の蟹なりと云共、杯かしるしのなかるべき、ぼろをんく」（安永森本もほぼ同じ）、寛政有江本は「東方降三世明王色々ノコトヲ云テイノリ」、安政賢通本は「それ山伏と言つば、山に起き臥すによつての山伏なり、…」（杭全本も同じ）、賢茂五番綴本は「東方に降三世明王。南方に軍陀利夜叉明王。西方に大威徳明王。北方に金剛夜叉明王と。重子て数珠を押しんで。ホロラン

くくく」とある。

他流は、虎明本「それ山ふしといつば、ゑんの行者のあとをつぎ…」（虎清本も同じ）、虎寛本「夫山伏といつば、山に起ふすに依ての山伏なり…」（虎光本も同じ）、伊藤源之丞本「夫、山伏といつば、野にふし山にふすによつての山伏也…」、天理本「汝たしかにきけ、ゑんのむはそくの行躰を請、三つのお山をふみわけて、…」（古典文庫本も同じ）、続狂言記「夫山伏と申は、山に寝起きをする故に山伏なり…」とある。

江山本は、宝曆名女川本（「杯かするし」の小異。安永森本も同じ）を簡略にしたかたちといえる。ただし、替謡として後に記すものと合わせると、名女川本とほぼ一致するが、傍線部は独自の文句である。

概して、本曲では「東方降三世明王」以下五大明王に祈るのが、鷲流の基本のかたちらしい。ただし杭全本・安政賢通本は、他曲また他流にもある「山伏と言つば…」の文句となっている。虎明本は能「葵上」の文句に基づき、いささかことごとしい。天理本・古典文庫本も独自の文句であるが、狂言集成本は、「それ山伏といつば山伏なり…」という通常の祈りである。

9、「朝比奈」

【朝比奈の名ノリ】

是ハ娑婆で名をゑし小林朝比奈の三郎義秀成が…

享保保教本は「小林ノ朝比奈ナルガ 又娑婆ニ名ヲエシ朝比奈ノ三郎義秀ナルカトモ云」、宝曆名女川本は「小林の朝比奈の三郎義秀成るが」、常磐松文庫本は「是は朝比奈の三郎義秀成が」、寛政有江本は「是ハ娑婆に隠れもなひ朝比奈の何某なるか」、安政賢通本は「これは娑婆に隠れも無い、朝比奈の三郎義秀なるが」（賢茂五番綴本も同じ）とある。

他流は、虎明本「是はあさいなのなにごしにて候」、伊藤源之丞本「是は朝比奈の三郎何某です」、虎寛本「是は、娑婆に隠れもない、朝比奈の三郎義秀です」（虎光本も同じ）、天理本「是はあさいなの三郎なにごしにて候」、古典文庫本「是は娑婆にかくれもない朝比奈の三郎義秀でござる」（狂言集成本「朝比奈の三郎何某」）、続狂言記「是は朝比奈の三郎何がし」とある。

江山本は右のように「小林の朝比奈」と名乗るのが特異である。これは享保保教本・宝曆名女川本も同様。寛政有江本以下の仁右衛門派及び他流には、小

林ということなし。伝右衛門派の特徴といえよう（ただし、常磐松文庫本は「小林の」なし）。なお、朝比奈が「小林」と称する理由は不明である。

また、江山本では、この後閻魔の前でも、

是こそ娑婆で名ヲ得し小林の朝比奈の三良吉秀じや

と名乗る。この場面では、享保保教本・常磐松文庫本は「小林」ということなし。宝曆名女川本のみ「小林の朝比奈の三郎義秀よ」と言う。他流・続狂言記はいずれも「小林」ということなし。従って、この二度目の名ノリの文句は、宝曆名女川本のみと近似する。

【語り】

建曆三年五月三日の早天（元）二大御所の南表ニ押寄…

傍線部は、享保保教本「建曆三年五月三日ノ早天ニ」、宝曆名女川本「建曆三年五月三日の早天に」、常磐松文庫本「建曆三年五月三日の早天に」とある。寛政有江本は語りの詞章を記さない。安政賢通本は年号なし。賢茂五番綴本も同様に年号なし。

他流は、虎明本「中にも五月二日に」（虎寛本同じ。虎光本は「に」なし）、伊藤源之丞本「中にも五月六日に」、天理本「五月三日の早天に」（古典文庫本・狂言集成本も同じ）とあり、続狂言記は年月日なし。

「建曆三年」の年号は、享保保教本・宝曆名女川本・常磐松文庫本に共通しており、伝右衛門派の特徴らしい。仁右衛門派及び他流は年号がない。なお、『吾妻鏡』によれば、和田合戦は建曆三年五月二日〜三日とする。

さらに語りの続きで、五十嵐小文治を振り回し、投げつけるところ。

彼いがらしヲ近々と取て引よせ左りへねじてハどうとなげ右へねじてハどうとなげあちへなげ、こちへなげ

享保保教本は「彼小文次ヲ近々ト取ツテ引寄セ左ノ方ヘ捻テハドウド投右ヘ捻テハドウドナゲアチヘ投コチヘナゲ」、宝曆名女川本「かの五十嵐をちか／＼と取つて引よせ、左りの方へねじてはどうどなげ、右へねじてはどうどなげ、あちへなげ、こちへなげ」、常磐松文庫本は「かの小文治取て近々と引寄せ左りへねじてハどうとなげ右へねじてハどうどなげあちへなげこちへ投げ」とある。寛政有江本は語りの詞章なし。ただし「あちへなげこちへなげ」のみ記す。安政賢通本は「かの五十嵐を近近と取つて引き寄せ、右へ捻ぢてはどうと投げ、左へ捻ぢてはどうと投げ、あちへ投げこちへ投げ」（賢茂五番綴本も同じ）と

ある。

他流は、虎明本「かのごぶんじをとつてひきよせ、くらのまへわにおしつけ
て、(下書き略) 右へはきり、左へはきり、きり、くとおしまはしてあ
りしよな」(伊藤源之丞本・虎光本も傍線部ほぼ同じ。虎寛本は「左へはきり、
右へはきり、」、天理本「彼ごぶんじをちかづけ、こみ、のわきをつかまへ、
くらのまへわにひきつけ、左へはきり、右へはきり、こりりく」と、こ
ばかしてあるぞとよ」(狂言集成本もほぼ同じ)、古典文庫本「彼小文治を招き
よせ小耳の脇を取て引寄あなたへはこりりこなたへはこりりこりりく」とこ
ばして有ぞとよ」、続狂言記「かの小文次を取て引き寄せ、鞍の前輪に押し当て、
左へはきり、右へはきり、くく」と押し回して有しよな」とある。

ここの文句は鷺流両派に共通。ただし仁右衛門派は左右が逆。江山本は特に
宝曆名女川本に近い。他流は表現が異なる。続狂言記は大蔵流に同じ。

【キリの話】

熊手ない鎌金差棒ヲ持する中間無キ俣二閻魔王ニくづしと持せて先へあ
ゆませ勢ひつよく朝比奈ハく浄土へとてこそ急ぎけれ

享保保教本は「熊手長鎌カナザイ棒ヲ持スル中間ナキマ、二閻魔王ニくづ、
シト持セテ先ニ歩セ勢ツヨク朝比奈ハ浄土へとテコソ急ケレ」、宝曆名女川本
は「鉄搭羅鎌金才棒を、持する中間なきま、に、ゑんまわうにく、づつしと
持せて、さきへあゆませ、いきおひつよく朝比奈は、浄土へとてこそいそぎ
けれ」、常磐松文庫本は「鉄搭羅鎌かな才棒を持する中間なきま、に閻魔王に
くづつしと持せて先へあゆませいきおひつよく朝比奈ハ浄土へとてこそ急ぎ
けれ」とある。寛政有江本は「くまてないかまかなさいほうを。もたせるちう
けんなきま、に。ゑんま王にくすつしともたせて先へあゆませいきをいつ
よくてあさひなハ。浄土へとて社いそぎけれ」、安政賢通本は「熊手・羅鎌・
鉄撮棒を、持たする中間なきまに、閻魔王に、閻魔王にづしと持たせて、先
へ歩ませ勢強くて朝比奈は、浄土へとてこそ、急ぎけれ」(賢茂五番綴本も同じ)
とある。

他流は、虎明本「くまでなひがまかなさいほうを、もたする中げんのなきま、
に、ゑんまわうにく、づつしともたせてあさいなは、じやうどへとてこそ、
いそぎけれ」(虎寛本・虎光本も同じ。伊藤源之丞本は「えんま王に」の返し
がなく、「いそぎける」とする。)、天理本「此ほとちうけんにごことかきつるに、

熊手・ないかま・かなさいほうを、ゑんまわうにつつしともたせ、くてあさ
いなは、浄土へとてこそ参りけれ」(古典文庫本・狂言集成本も同じ)とある。
続狂言記は虎明本に同じ。

江山本の傍線部は、鷺流両派に共通する。仁右衛門派は「強くて」と小異が
あるものの、この部分は鷺流独自の表現といえる。

注

- (1) 春日庄作の生年が、従来言われていた文化十四年(一八一七)ではなく、
文化十三年(一八一六)とするのが妥当であるとの推定は、拙稿「山口鷺
流」(『国立能楽堂特別企画公演 鷺流狂言の流れをたどって』パンフレッ
ト、平12・10所収)参照。
- (2) 石川弥一氏「地方に残存する鷺流狂言」(『国語と国文学』昭29・5)。
- (3) 現存する山口鷺流の台本は、鷺流狂言記録作成委員会編『山口鷺流狂言
資料集成』(山口市教育委員会、平13)に主要なものが翻刻されている。
- (4) 平川村は、現在山口市内。石川弥一氏によれば、「現在山口市外平川に
後裔がいるが、他人が籍だけ襲ったもので血縁はない」(注(2)論文)
ということである。
- (5) 江山家については、石川弥一氏「山口に残存する鷺流狂言」(山口市鰯
石能狂言研究会、昭32)。同氏「鷺流狂言に関する二・三の考説」(『山口
女子短期大学研究報告』2、昭28・11)。樹下明紀氏「鷺流狂言再考」(『山
口県文化財』28、平6・7)参照。
- (6) 鷺流狂言記録作成委員会編『山口鷺流狂言資料集成』(山口市教育委員会、
平13)書誌・本狂言編一により、若干補った。
- (7) 山口鷺流狂言保存会蔵「狂言手附本 一」所収の春日庄作自筆本「首引」
は、一部伝右衛門派と思しき部分もあるが、全体としては大蔵流に近い。
また、河野晴臣氏編『鷺流狂言手附本 附小舞問』(山口市中央公民館
昭46)所収「空腕」、同氏編『鷺流狂言手附本 追巻 附問三曲』(山口市
中央公民館、昭47)所収「寝代り」などは、仁右衛門派に近い部分がある。
- (8) 「柑子」の「六波羅(腹)」の秀句の位置については、拙稿「小名狂言に
おける(とりなし)の方法」(『同志社国文学』28、昭61・12)においても
考察した。

- (9) 鳥津忠夫氏『能と連歌』（和泉書院、平2）所収「八句連歌」は、連歌に持ち込まれるまでの発端部について、大蔵・和泉・鷺三流の相違を指摘した上で、「鷺流の型が三流のうちで、もっとも素朴であることからは、案外に古い型を留めていると見てもよいのではないかと思う」とされる。また、橋本朝生氏「狂言と俳諧連歌」（『中世史劇としての狂言』若草書房、平9所収）は、発端部について、「鷺流が大蔵流の形を簡略化したのだからというぐらいは推測できようが、大蔵流・和泉流の両形のどちらが先行するかはわからない」とされる。
- (10) 注(9) 橋本朝生氏論文にも、本曲で詠まれる連歌について、虎明本に対する校異の表が掲げられている。
- (11) 宝曆名女川本の手柄話に誇張的・戯画的表現が目立つことについては、拙稿「狂言「空腕」考」（『山口県立大学国際文化学部紀要』11、平17・3）においても指摘した。
- (12) 山口市歴史民俗資料館蔵『鷺流狂言記』天・地二冊。下関市長府の浜田家旧蔵。鷺流狂言記録作成委員会編『山口鷺流狂言資料集成』（山口市教育委員会、平13）本狂言編二所収。
- (13) 笹野堅氏「古本能狂言・間につきての研究（三）」（『書誌学』52、昭12・10）。永井猛氏『狂言変遷考』（三弥井書店、平14）第二章「鷺流」宝曆名女川本」について参照。
- (14) 「序」に「鷺寛三郎相伝直写秘訣とも云ふべきの一珍冊子」とある。「鷺寛三郎」は、鷺寛太郎（十世鷺伝右衛門）の誤りか。
- (15) 太郎冠者の仕方話を中心とする山口鷺流「千鳥」の特色については、拙稿「山口鷺流の演出」（『新編日本古典文学全集月報』69、平12・12）、「山口鷺流の「千鳥」」（『京都市立芸術大学創立一三〇周年記念 山口鷺流狂言―地域伝承の可能性―資料、平22・6所収）でも述べた。

〔付記〕

本稿は、平成二十二～二十四年度日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究（C））による研究「山口に現存する鷺流狂言の系統的研究」の成果の一部である。

（日本芸能論）

On the Eyama Collection of Kyōgen Texts at Center for Regional Literature and Resources Attached to Yamaguchi Prefectural University, Part I

Hideo INADA
(Japanese Performing Arts)

Concerning the Eyama collection of Kyōgen texts, we considered the following points of the system of play script : 1) The Eyama collection of Kyōgen texts fundamentally belong to the Den-emon branch of the Sagi school . 2) Those texts are extremely precious play scripts of the Sagi school at the domain of Hagi in late Edo period.